

「小説」の系譜

一 「物語」と「小説」の間に

「物語」と「小説」の違いについて一般的に明確な違いは見出だしくいようです。授業において生徒に発問すると彼らは概して「物語」を「口頭で語り継がれてきたもの」（あるいは「空想的」「子ども向け」「古典的」として、「小説」を「作者によって意図的に創作されたもの」（あるいは「現実的」「一般向け」「近代的」として）それぞれイメージしている状況がありました。それでは、各方面の研究者から提示された中からいくつかの定義を見ましよう。

国文学者笹淵友一（ささぶちともいち）は一般的な概念とことわったうえで、古典的な内容のものを「物語」、近代的な作品を「小説」とする考えを提示しつつ、両者の連続性を指摘しています（『物語と小説―平安朝から近代まで』）。アラビア文学者岡真理（まり）は「物語」を小さな共同体の中で語られたもの、「小説」は地域や共同体を越えて異質な読者によって読まれるものとしています（『思考のフロンティア記憶／物語』）。文学者田中実（たなかみのる）は「物語（記憶）」に対して、これに「書き手の自己表出（詩）」が加わったものが「小説」であると解釈しています（『読みの背理』を解く三つの鍵）。

それぞれが多様な解釈によって両者を区分していることがうかがえます。現代において「物語」と「小説」という言葉に対する解釈は必ずしも一様に定まっているのではなく、新しい定義づけがなされている状況が読み取れま

す。辞書には一体どのように定義されているのでしょうか。『広辞苑』第七版（平成三十年（二〇一八））では、両者の区別について次のような記載があります。

【物語】

作者の見聞または想像を基礎とし、人物・事件について叙述した散文の文学作品。日本文学では平安時代から室町時代までのものをいう。大別して伝奇物語・写実物語または歌物語・歴史物語・説話物語・軍記物語・擬古物語などの種類があり、「日記」と称するものの中にはこれと区別しにくいものもある。ものがたりぶみ。

【小説】

① 「漢書芸文志」「小説家者流は、蓋し稗官より出づ、街談巷語は、道聴塗説の者の造る所也」市中の出来事や話題を記録したもの。稗史。

② （坪内逍遙による novel の訳語）文学の一形式。古代における伝説・叙事詩、中世における物語などの系譜を受け継ぎ、近代、とりわけ一八世紀以降の西欧で発達、詩に代わって文学の中心を占めるに至る。韻文の形式や手法から解放され、どのような素材でも自由に扱うようになった。四迷、小説総論「されば模写は小説の真面目なること明白なり」

ここでは「物語」を中古・中世の散文作品と捉えているのに対し、「小説」は主に西洋から伝わった近代の散文形式作品と定義づけています。「小説」の語句は、『莊子』外物編「飾リテニ小説ヲ」以テ干ム「梟令ヲ」を典拠としており、『漢書』芸文志にも「小説家者流、蓋し出ツ於稗官」。街談巷語、道聴塗説所「造ル也」とあるため、当初は「取るに足りない議論、世俗の笑話」といったイメージだったことがわかります。翻って漢文教材における「小説」は時代と内容から次の三つに分類されています。

- ・六朝志怪小説…『幽明録』、『搜神記』、『搜神後記』
- ・唐代伝奇小説…『杜子春伝』、『枕中記』、『遊仙窟』
- ・明清白話小説…『三国志演義』、『水滸伝』、『西遊記』

この「小説」が文芸性を高めた時期について魯迅は「小説も詩と同じように唐代になって一変する」（『中国小説史略』）と評したように、漢詩とほぼ期を—にして芸術性が高まっていきました。近代散文作品において「小説」という名称が定着したのは、『広辞苑』の記載にも見られるように、坪内逍遙の『小説神髓』（明治十八年（一八八五））によるところが大きいでしょう。この文芸評論は人間の心情から小説を描くべきと説きながら、功利主義や勧善懲悪的な文芸を退けています。それまで戯作者の地位は低く、卑しめられていましたが、逍遙の「小説は美術なり」の一言によって高められていったことは想像に難くないところでしよう。翌十九年（一八八六）に発刊された末広鉄腸の政治小説『雪中梅』序文には尾崎行雄の次のような小説観が見られます。

邦人未だ小説の何者たるを知らず。動もすれば、之を視て、婦女子消間の玩具にして士君子の手にだも触るべき所に非ずと為す。焉ぞ知らん、小説（今綏当の訳語を得ざるが故暫く小説の二字を以てnovelに充つ。以下単に小説と記する者ハ是なりと知るべし）ハ近世文学上の一大発明にして其文化を賛育せること実に少小ならざるを、古の歴史ハ荒誕怪奇にして、編者の想像に成れる者多しと雖ども、尚ほ是れ歴史にして、小説に非ず。支那の古に飛燕外伝、穆天子伝等あれども、復た一部の小説と称すべき者なきに非ずや。希臘、羅馬、波耳西、亜拉比亞、皆な怪譚奇話に富めり。而して古昔復た一部の小説と称すべき者なかりしに非ずや。

ここでは中国のほかにギリシャ、ローマ、ペルシャ、アラビアなどの諸国に怪譚奇話があった事実に触れながら、十七世紀の英国小説あたりに「小説」の直接の淵源を見えています。つまり、もともとは多義的な要素を含んでいた「小

「説」の語に近代的な定義が付されているわけです。それ以前の日本において「小説」の語はどのように用いられていたのでしょうか、次節で考察します。

二 江戸時代における「小説」

近代以前にわが国の文学観の中で「小説」の語が話題にのぼったのは江戸時代のことですが、こちらは現代とは意味が異なっています。江戸中期の儒医にして戯作者の都賀庭鐘は、「読本」の嚆矢に当たる『英草紙』（寛延二年（一七四九））という作品を世に出したことで文学史上に大きな足跡を残しました。この庭鐘について評判記には、「小説家の学者そふな」、「あれこれ小説集カ板にござります」（『三都学士評林』明和五年（一七六八））との紹介がありますが、日本古典文学者の中村幸彦はこの「小説家」とは「白話（小説）の研究者」であると指摘しました（『中村幸彦著述集』第十一巻）。つまり、「小説家」とは中国白話小説を翻訳や翻案する人物を指しており、現代のいわゆる「作家」と同義ではありません。これに対して「物語」と言えば、日本の古典文学を指すときに限定されます。本居宣長も「中むかしのほど、物語といひて、一くさのふみあり。物がたりとハ、今の世に、はなしといふことにて、すなはち昔ばなし也」（『源氏物語玉の小櫛』）と述べています。それは「歌物語」、「軍記物語」、「歴史物語」などといった文学ジャンルを表す場合もあれば、「源氏物語」、「伊勢物語」といった個々の作品の題名にも取られています。江戸中期の国学者賀茂真淵が『国意考』（明和二年（一七六五）頃）により漢語の煩雑さを批判し、和文の重要性を主張しました。真淵の弟子筋に当たる建部綾足や上田秋成によって中国の白話小説の趣向を借りた『西山物語』や『雨月物語』が世に問われましたが、これはいわば「小説（漢文）」の「物語（和文）」化であったことを意味しています。

明代以降、中国から『水滸伝』、『三国志演義』、『西遊記』などの白話小説が陸續とわが国に伝えられました。荻

生徂徠の古文辞学派による白話受容と相俟つて、唐話学習が盛んになり、江戸中期以降に大流行しました。これに伴って、白話小説の趣向を借りながら日本風に書き改められた翻案文学作品が文人の間に広がりしました。こうした作品は一般に「読本」というジャンルに区分されますが、『水滸伝』を翻案した滝沢馬琴の大作『南総里見八犬伝』もその一つです。白話短編小説集『三言二拍』を抜粋施訓した岡白駒『小説精言』（寛保三年（一七四三））の序文には次のような記述が見られます（以下、訓点は筆者による）。

曼倩ノ神異洞冥諸記、茂先ノ博物志、今升ノ搜神記、彦升ノ述異、休文ノ奇諧、学ノ者多ク称スレ焉。漢武内伝、飛燕外伝、雖モレ曰フト「別史ト」、亦古之小説也。自リレ此已ニ還タ如キハ、二虬髯、紅線、隱孃、白猿諸伝ノ「雖モレ近シト」二誕ニ一乎、辞ハ資リニ史漢ニ「総テ厥ノ婦スレバ」塗ニ、則チ皆史之流亜也。

東方朔『神異経』、張華『博物志』、干宝『搜神記』、任昉『述異記』などに加えて、『漢武内伝』、『飛燕外伝』を指して「古の小説」と称し、さらに『虬髯客伝』、『紅線伝』、『轟隠娘伝』、『補江総白猿伝』といった作品も史書の体裁に倣っていれば、これに類することが述べられています。ここでは六朝志怪小説、唐代伝奇小説を総称して「小説」と呼んでいた事情が浮かび上がります。先の庭鐘も第二作『繁野話』（明和三年（一七六六））序文において「近路行者三十年前、国字小説数十種を戯作して茶話に代ゆ」と述べるほか、平賀源内『風来六部集』所収の『天狗鬪體鑿定縁起』（安永五年（一七七六））には、門人戯蝶による「我風来先生、戯に筆を採、多くの小説世に行れてより」という序文もあります。ここでは「小説」に「よみほん」というルビが施されており、「読本」と「小説」が不可分な関係として捉えられました。伊丹椿園『唐錦』（安永八年（一七七九））や滝沢馬琴『南総里見八犬伝』第九輯（天保十一年（一八四〇））それぞれの序文を見ましましょう。

——小説ハ夷堅齋諧を祖とし宋の孝皇侍従に命して日に民間の奇事を探りきかしめて太上慰め給ひしより通俗演

義の一種始めて盛に行れ、元の施羅の二子巧ミを究め妙を尽し、大に斯道を述たり。

（『唐錦』序文）

・漢土に、齊諧・異苑の二書あり。国朝に浦島子伝、続浦島子伝あり。便是和漢小説の鼻祖、戲墨の嚆矢といひつべし。

（『南総里見八犬伝』第九輯卷三十三簡端附録作者総自評）

「中国小説」の源流として『夷堅志』、『齊諧記』、『異苑』などの書名に触れたり、施耐庵の『水滸伝』や羅貫中『三国志演義』などを代表作に掲げたりしている点に特徴があります。上田秋成も『ますらを物語』の中で「もうこしの演義小説」こゝの物語がみ、その作れる人のさかし愚にて、世にとどまる」と使い分けています。このほか平井権八の事件をもとに、白話小説の趣向を借りて馬琴が翻案した『小説比翼文』、白話小説の語彙をまとめた『小説字彙』、白話語彙を用いた狂文『本朝小説』、『小説白藤伝』などもあり、江戸時代の人々にとって「小説」という言葉は中国の文学作品を意識したものであったことがわかりますね。

三 伝統文化の中の「小説」

明治十八年（一八八五）発表の『小説神髓』以降、尾崎紅葉の『金色夜叉』、泉鏡花『高野聖』、夏目漱石『三四郎』、芥川龍之介『羅生門』と多くの近代の名作が世に問われました。

近代以前は第一義的に中国の散文作品を意味した「小説」が翻案を通じてわが国の散文学を指す用語としても使われましたが、近代に入ると坪内逍遙等によつて読み換えられて新しい意味が付与されたこととなります。つまり、「小説」も近代以降に誕生した「日本漢語」的な側面を持つていたことは注意したいところです。中国の散文作品は「小説」の語を介してわが国の文学作品に積極的に受容されていた状況がうかがえます。

江戸後期の儒学者斎藤拙堂は『拙堂文話』巻一（文政十三年（一八三〇））において和漢文学作品の関連性につい

て次のように述べています。

物語草紙之作ハ在^{レバ}ニ於漢文大ニ行^{レシ}之後^ニ一則^テ亦不^レ能^ハ無^キ所^モ本^{ツク}焉。枕草紙ハ其^ノ詞多ク沿^フニ李義山^ノ雜纂^ニ。伊勢物語^ハ如^シト^下從^リニ唐^ノ本事詩、章台楊柳伝^一来^{タル}者^ノ上。源氏物語^ハ其^ノ体^ハ本^{ツキ}ニ南華^ノ寓言^ニ、其^ノ説聞情^ハ蓋^シ從^リニ漢武内伝、飛燕外伝及^ヒ唐人^ノ長恨歌、霍小玉伝^ノ諸編^一得^{タル}来^{タル}。其^ノ他^ノ和文^ハ凡^ソソ曰^ヒレ^レ序^ト曰^ヒレ^レ記^ト曰^ヒレ^レ論^ト曰^フレ^レ賦^ト者^ハ既^ニ用^キレ^バ漢文^ノ題目^ヲ一則^テ雖^モ有^リト^ニ真假^之別^一、仍^ハ是^レ漢文^ノ体製^{ナル}耳^ノ。

ここでは国風文化の代表作である『枕草子』、『伊勢物語』、『源氏物語』などがそれぞれ『李義山雜纂』、『本事詩』、『漢武内伝』、『飛燕外伝』などの漢文学の影響を受けたものと述べられています。さらに近年、わが国の「物語の祖」と位置づけられてきた『竹取物語』もまた白居易の漢詩に触発されて創作されたとする説が中国古典文学者許永健によって提示されました（『漢籍伝来 白楽天の詩歌と日本』）。

芥川龍之介の『杜子春』や中島敦の『山月記』は今なお幅広い読者から愛読されています。近代名作の誕生の背景には中国古典由来の漢文小説が翻案を通じて受容された歴史がありました。現代人が愛読する「小説」もその語源を遡れば、漢文学との深い関わりも見えてきます。このような観点から漢文教材を眺めるのも興味深いものではないでしょうか。